

A-2

学芸員養成課程の実務教育と教育プログラム制作についての研究

—野外博物館「星を見る会（観望会）」の実施から—

A study on the practical education and curriculum creation of curator training courses
-From the implementation of “Meeting the Stars (observation)” as an open-air museum-○田中裕基¹, 伊豆原月絵²*Yuki Tanaka¹, Izuhara Tsukie²

Abstract: The museum is a facility that requires education for various people of different ages and interests. This paper examines the importance of practical education in curriculum training courses aimed at curators working in the museums. There are few practical training in curriculum training courses required by the Ministry of Education. When the students implemented the program, problems were seen in planning, and the necessity of practical education to compensate for the lack of practical training was found.

1. はじめに

博物館における教育は、学校教育のように同じ年齢層の人が、同じ内容の教育を受けて進級進学していくのとは異なり、子供から大人まで様々な年齢層の人を対象とする必要がある。また、博物館の教育、すなわち社会教育では、年齢が同じであっても知識や興味が同じとは限らない。このようなことから、博物館教育では、1つの展示やプログラムの中でも、専門的な知識のある人向け、専門的な知識のない人向け、また、子供向け、大人向けなど、それぞれの来場者の興味に即した解説表現が必要となる。このように、博物館においての教育は、常に様々な状況に対応することが求められている。

筆者らは、学芸員資格を取得し、博物館学を研究している。筆者の伊豆原は、日本大学理工学部の学芸員養成課程の主任教員として、教鞭をとっている。また田中は、日本大学理工学部の学芸員養成課程で学芸員資格を取得して、大学卒業後は東京都西東京市にある多摩六都科学館に就職している。

多摩六都科学館は1993にオープンした科学館で、多い年では年間25万人が来館する。来館者の内訳は大人と子供が半分で、「平成30年度版多摩六都科学館の概要」によると、約60%が家族連れで、約20%が大人のみでの利用であることがわかる。

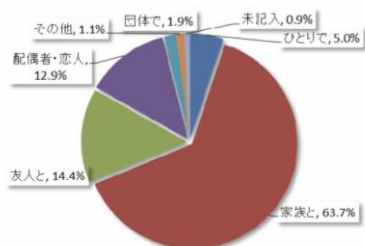


Figure 1. Questionnaire survey results of visitors at Tama Rokuto Science Museum.

出典:多摩六都科学館組合、「多摩六都科学館の概要-平成30年度版-」, 2018, p13.

多摩六都科学館のアンケート調査の結果からわかるように、博物館の中でも、特に科学館は、かなり来場者の年齢や興味の幅は広い。このように多岐にわたる年齢層や来場目的などが異なる来場者に満足していただくためには、いくつかの教育パターンを考慮して提供することが必要である。しかし、そのための準備する時間とそれを叶える技術を要することが、博物館にとっては、重要課題といえる。

本論文では、博物館に於いて、最も重要な役割を担う学芸員に必要な実務教育の一貫として、教育プログラムの構築方法と学芸員の教育について考察するとともに、その学芸員を養成する学芸員養成課程の実務教育としての重要性と問題点について考察したい。

2. 実務教育の一例「野外博物館・星を見る会」

学芸員養成課程（以下学芸員課程）では、学芸員としての経験を積むために、様々なプログラムを提供するが、本論文で取り上げるのは、実習などの教科とは切り離された、あくまでも学芸員課程の履修生である有志学生を対象に「学芸員」として必要な知識や思考力を養い、その力を上げるためであり、学芸員にとって必要なボランティア精神を養うために行ったものである。

今年は、7月13日（土）に船橋キャンパスに於いて、野外博物館として捉えた、「星を見る会（観望会）」を開催した。地域の住民に向けて行う「星を見る会」は、日本大学理工学部の学芸員課程の教員である伊豆原の指導の下で、学芸員課程の履修者有志が開催し、3回目の実施となった。その際、学芸員課程のOBであり、現役の学芸員である田中は、来場者教育として、夜空

の星について夜空の星の映像（アプリ）を用いて解説を行うとともに、実施前の準備期間には、学生たちに星空の解説指導を行った。

準備期間には、伊豆原が学生を指導し、来場対象者を想定した星空の教育プログラムや広報活動として、ポスターやチラシを作成した。また、各種の教育教材として、解説パネルとワークシートも作成し、その指導を行った。

3. 「星を見る会」の実施効果

3-1. 教育プログラムの構築

「星を見る会」は理工学部で天文学及び、学芸員課程を履修して博物館学を学んでいる、専門性と解説コミュニケーションに長けた学生が、知識を活かして実務経験を積むために企画されたプログラムである。2回目以降の開催では「星を見る会」という主題は変えていないが、観測対象の星は時期によって見えるものが異なる。そのため開催毎に有志学生が内容である観測対象を決め、必要な解説パネルや教育プログラムを作成する。

有志学生は10名以上参加し、学年の違いからそれぞれの学習進度が異なる。観望会という企画を踏襲しつつ、内容を回毎に参加する有志学生が考える事で、大人数で1つの企画を考えまとめる難しさを省きつつ、教育プログラムを考え作成出来るため、学芸員養成課程の実務教育の入門に最適なプログラムである。

3-2. 学生の役割

学芸員資格取得を目指す学生のうち博物館学の多くを学んだ3・4年生が中心となり教育プログラムの企画・作成など事前の準備を行う。1・2年生は当日に実施者として参加して、上級生から仕事を教わり、イベントを運営するために必要な準備やスタッフの動きなどを学びながら補佐をする。

3-3. 実施準備

博物館学を多く学んだ3・4年生でも、実際にプログラムを作成して人に体験してもらうという実務の経験はほとんどない。学芸員の義務として、企画して外部に告知したイベントは、告知した日時を守って開催することが求められる。実務経験の少ない学生がプログラムを無事に開催するには、準備が間に合わなくならないように、スケジュール管理を行うことが大切である。スケジュールの立て方は必要な項目毎に細かく書き出すと作業の見落としが防げるが、各項目の締め切り日はゆとりを持たせることが大切である。

4. 実施結果

過去3回の実施からいくつかの課題が見られた。

- (1).悪天候時の対策の不足
- (2).計画的な準備の不足
- (3).学生スタッフの知識不足

(1)は野外博物館ならではの課題点である。観測対象が星である以上曇りや雨では観ることは出来ない。しかし、曇天開催として参加者を呼んだからには晴れることをただ待つのでは無く、晴れなくても参加してもらえるプログラムを事前に計画準備しておく必要がある。

(2)は前項の実施準備に記載したスケジュール管理が出来ておらず、当日の準備量が多くなったため開始時間にパネルの掲示が間に合わない事態となった。パネルを見てもらう時間には間に合ったが、当日の時間管理の甘さが原因である。事前にスケジュールを立てていたとしても、当日までの準備が間に合っていない時は、当日のスケジュールを見直し、準備開始時間を早めるなど適切な対応を取る必要がある。

(3)は度々反省会で出される意見だが、勉強会の開催や専門性のある人が情報をまとめ、余裕を持って事前に共有できれば改善出来る事である。前項のスケジュールで事前学習の項目を作ることで対応する必要がある。

5. まとめ

学芸員課程で学芸員としての仕事を展示や経営、教育など様々な切り口で学習するが、いざプログラムを作成すると思い通りにならないという学生が多い。これは別々に学習した事を一連の流れとして復習する機会がなく、座学に比べて実習の時間がとても少ない事が一因である。この実習の経験不足を補うために、実務教育の入門としてこれからも「星を見る会」を開催して、スケジュールの指導など学生のスキルアップの場としていきたい。

6. 参考文献

- [1] 原千賀, 他 2名:「博物館学に基づく地域住民対象の星空観望会-運営方法と教育プログラムについて-」, 日本大学理工学部学術講演会予稿集, 2018.
- [2] 多摩六都科学館組合:「多摩六都科学館の概要-平成30年度版-」, 2018.